

本と社会

「人文ネットワーク」ニュースレター
2002年10月10日第2号

●発行元 人文ネットワーク
●印刷 (株)新栄堂 ●編集制作 (株)新評論編集部
●事務局 (株)新評論編集部内(担当:吉住)
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 3-16-28
Tel. 03-3202-7391 Fax. 03-3202-5832
E-mail: shm@eagle.ocn.ne.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々と連携して、我が国の人文書出版の現実を考え、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的な生産現場と切り離すことなく——一冊の人文書を読解します。要するに、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解を結びつけようというわけです。おそらく前者は著訳者の、そして後者は編集者の役割でしょう。両者の出会いから、新たな現実的知性は発見されるのではないのでしょうか。このニュースレターは、それをめざして発刊されます。

1冊の翻訳から広がる世界

●「地の利」による翻訳

エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリ著『南仏ロマンの謝肉祭』(原題『ロマンのカルナヴァル』)は、なかなかにして難産の子だった。この書の翻訳がどうやら出るらしいとの噂を私が耳にしたのは、かれこれ10数年前になるだろうか。やがて翻訳者が二転三転し、最終的に思いがけずも私に翻訳の話が舞い込んできたのが5年前(編集者のY氏とは、じつに20年ぶりの再会であった)。歴史家の仕事であるとの認識はあったものの、Y氏の「^{カルナヴァル}カルナヴァル」のタイトルに惹かれて引き受けた。というのも、翌年から1年間、交換教授で南仏のモンペリエ大学に行くことが決まっていたからである。何しろ本書は、著者が同大学で教鞭をとっていた時代に収集した資料がもとになっている。彼が引用・参照した論考の多くも、かなり容易に入手できるのではないか。かてて加えて、モンペリエならロマンまで半日もかければ十分往還できる——。

読みは見事に当たった。「地の利」による翻訳。あるいはそうも言えるだろう。詳細は省くが、ことほどさように本書の翻訳はフィールドワークを必要とした。本書が歴史民族学の書とされる所以だが、訳者としての私の倥傯は、そんな原著自体をフィールドワークするという、もう一つの愉悦に存分に浸れたところにある。

●『南仏ロマン』の世界を「全体的社会事実」という概念で説明

ところで、私は本書に開陳された世界を説明するのに、M.モースの「全体的社会事実」という言葉を使った。社会的現象が心理的現象でもあるという、デュルケーム的前提から出立するこの概念を、彼はイヌイットの季節で変わる居住形態、すなわち冬季=集住=共同住居(聖)と夏季=散住=家族テント(俗)というその二元論的対立が、分類体系や交換体系、親族・家族組織、所有権、性的関係、道徳、経済、審美観、そして祝祭などを具体的に規制ないし活性化するというメカニズムの謂として提唱した。

本書の舞台となった16世紀後葉のロマンでもまた、カルナヴァルの主導権争いを契機として、社会のすぐれて構造的な二元論的対立——階級や財産、職業、信仰、居住地、同宗団、特権(免税)など——が、町を一気に沸騰させている。つまり、象徴的な王国(レナーージュ)の建設と統治を特徴とするこの祝祭は、全体的社会事実の紛れもない表象(エン

ブレム)として、さらに社会の自己表現として推移し、最後に対立軸の一方の崩壊をもって終焉を迎えたのである。それは、体制側による民衆的祝祭の意味と機能の篡奪でもあった。

●現代の祝祭にどこまで民衆性を求めるべきか

しかし、こうした篡奪は何も近世フランスの一地方都市に限定されるものではない。たしかに「祝祭」と「民衆文化」とはこれまでの祝祭研究の中で、いわば定式的に結びつけられてきたが、周知のように、現代社会において、祝祭は多くが地域振興策や観光戦略、とりわけそれを情報資源とするマスメディアに篡奪されている。P.ヴィリリオが言うように、慣例や慣行は情報を管理するマスメディアの潜在力に専有されてしまうからだ(『情報エネルギー化社会』土屋進訳、新評論刊)。

この傾向は、じつは以前(「伝承的昔」)からみられた。ましてや分節化が著しく、意識の共有空間が瓦解して久しい今日、地域社会の日常的構造を脱聖化し、住民全体を沸騰する仮想現実の渦に投じるような祝祭に出会うことは難しい。すでにして祝祭は、多分に幻想的な共同体の統合エンブレムとしての地位を追われ、管理の論理に組み込まれている感すらある。換喩化された祝祭。ありていにいえばそうなる。

だとすれば、そうした祝祭にどこまで

民衆性を求めるべきか。この問いのもつ意味は大きい。(蔵持不三也)



『南仏ロマンの謝肉祭』カバー

●『南仏ロマンの謝肉祭——叛乱の想像力』E.ル・ロワ・ラデュリ/蔵持不三也訳、新評論。南仏の小都市を舞台に、祝祭空間の中でくりひろげられた叛乱=反税闘争の連鎖を解析し、16世紀の《全体的社会事実》の縮図を描き切る。四六判上製・704頁・5775円

●著者主要邦訳文献

『ジャスミンの魔女』(杉山光信訳、新評論、3360円)、『モンタイユ・ビレネーの村 1294~1324』(上・下、井上幸治他訳、刀水書房、上2940円・下3466円)、『ラングドックの歴史』(和田愛子訳、白水社、999円)、『新しい歴史—歴史人類学への道』(樺山紘一訳、藤原書店、2100円)、『気候の歴史』(稲垣文雄訳、藤原書店、9240円)※税込価

ル・ロワ・ラデュリの仕事と『南仏ロマンの謝肉祭』

本書について

●蔵持不三也(本書翻訳者)

本書は、エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリの『南仏ロマンの謝肉祭——叛乱の想像力』(原題『ロマンのカルナヴァル——1579年聖母潔斎の祝日から1580年灰の水曜日まで』Le Carnaval de Roman: De la Chandeleur au Mercredi des Cendres 1579-1580, Gallimard, Paris, 1979)の全訳である。

一つの事件に含まれる無数の事実から、事件自体はもとより、その歴史的・社会心理的背景や、事件によってもたらされたさまざまな社会的変容をいかにして析出し、記述するかは、歴史学のいつに変わらぬアポリアとしてある。南仏の小都市ロマンで16世紀後葉に起きた事件を扱った本書は、そうしたアポリアに真正面から向き合う。

カルナヴァルの主導権争いに端を発したこの事件は、町の支配者層を代表する裁判官と、民衆側を代表する(親方)職人を主人公とし、免税特権に象徴される構造的な階級対立などを顕在化して、ついには叛乱化した事件を導いた職人たちの殺害や懲罪へと推移する。本書の関心は、しかし事件の単なる再構成にはない。カルナヴァルの象徴的な民俗文化を見据えながら、当時の課税台帳や土地台帳といった、一般的に書き手の主観が比較的入りにくいとされる史料を駆使して明らかにしたロマンの社会的・経済的構成を縦糸とし、裁判官グランの記録と、より中立的な公証人の記録の対比的検討を横糸として、一見些細と思われる事件の、だが、実際にはまことに壮大な全体像をドラマティックに織り上げてい



エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリ

著者プロフィール

●Emmanuel LE ROY LADURIE

1929年、北仏ノルマンディーの県都カン近郊のカトリック系名家に生まれる。ヴィシー政権の閣僚だった父に反撥して、1949年、国立師範学校入学と同時にフランス共産党に入党するが、56年ハンガリー動乱を機に離党。上級教授資格取得後、モンペリエ大学講師やパリの高等社会科学研究院主任教授、コレージュ・ド・フランス教授、国立図書館長などを歴任し、新しい歴史学を標榜する『経済・社会・文明年報』いわゆる『アナール誌』の編集にも携わる。

く。本書の醍醐味はまさにここにこそある。

こうした本書の意義は、歴史研究に画期的な方法論と視座とを提出しただけではなく、マクロヒストリア(History)がミクロヒストリア、つまり無数の事実=物語(histories)から成り立っていることを再認識させてくれたところにある。訳者の推測では、著者は自らその渦中に身を置いていた1968年のあの「5月革命」を、ロマンの事件と重ね合わせているようにも思えるが、むしろそこでも、学生のミクロヒストリアが最終的にマクロヒストリアによって圧殺ないし篡奪されているのだ。だとすれば、あるいは本書の仕掛けをこう断言してもよいだろう。歴史の感性と慣性ないし陥穽。(くらもち・ふみや 早稲田大学教員/民族学)

書評

祝祭を通して歴史は動いた

●白石嘉治(上智大学他、教員/文学)

16世紀末の小都市ロマン。税制に対する不満が熾り続けていた。それはカルナヴァルの祝祭をきっかけに叛乱となり、流血の結末をむかえる。この事件をめぐる、本書では600頁を超える記述が繰り広げられる。

著者ル・ロワ・ラデュリの戦略は明らかである。ギンズブルグの諸著作やコルバンの近著『記録を残さなかった男の歴史』(1998)



シャパエの丘から望むイゼール川左岸のロマンの街。16世紀の版画。

を思い起こそう。歴史の細部の厚みを解きほぐす試みが続けられている。1979年に刊行された本書も、その流れのなかの記念碑的作品であり、たったひとつの事件がさまざまな観点から捉えられる。とりわけ、第7章以後の文化人類学に基づいた分析は本書の白眉のひとつである。だが、前半も読み飛ばしてはならないだろう。著者は事件の前提を腑分けし、叛乱の背景となる社会的・経済的な対立を浮かび上がらせる。国際的な地域紛争の多くが宗教的・文化的な対立として特化され議論されている今日、著者の透徹した分析は、その種の議論の危うさも示しているのではない。

いずれにせよ、こうした手続きを踏みながら、著者は当時の哲学や政治学の言説も検討し、最後には近代における平等という問題にまでたどりつく。叛乱は税制の不平等に端を発していた。しかも祝祭空間では、不平等を孕む日常が揺るがされる。一般に祝祭の機能は、その後に日常の秩序を回復するところにある。いわば祝祭はそのための象徴を備えた擬制である。だがロマンでは事件が起きた。想像力が祝祭の擬制を凌駕し、祝祭は平等を求める人々の叛乱の場となる。歴史が祝祭を通して動いたのである。われわれにとっても、同様なことは起こり得るのだろうか。事件の全貌を描き出そうとする著者は、現代社会との安易な比較を慎む。ただときおり左翼の転向やプジョード主義という現在の極右にもつながる民衆運動に触れる。そして一度だけ、祝祭と叛乱が交錯した68年の5月革命を引き合いに出す。さりげない身振りだが、読者は行き届いた訳文と訳注を辿る愉悅を味わいながら、祝祭と民衆運動の行方について思いをこらすことができるはずである。

書店からの声

●三省堂書店神田本店 加納淳一

今、アナールの棚にかつての活気はない。それは、現在のアナール派があらゆる学問領域を越えていくことを目指した結果、読者に学派としてのアイデンティティがわかりにくくなってしまったことと関わりがあるのではないかと。もっとも、「活気がない」とは日本史(特に中・近世)や国際緊張が集中する中近東関連の書籍と比較しての話である。

アナール派第二世代の重鎮ブローデルや、第三世代を担ったル・ゴフ、ル・ロワ・ラデュリらによって生み出された多くの著作は、今でも堅調な売行を見せている。ブローデル『地中海』は言うに及ばず、コルバンは新刊『風景と人間』に牽引されて『音の風景』『人喰いの村』(共に藤原書店)といった既刊も動いている。著名な人物を題材にして伝記の領域を切り拓いたル・ゴフ『聖王ルイ』(新評論)、アナールらしく膨大な史料を駆使したル・ロワ・ラデュリ『モンタイユ』(刀水書房)『南仏ロマンの謝肉祭』(新評論)なども好調だ。



三省堂書店神田本店 西洋史コーナー

座談会／『南仏ロマンの謝肉祭』を読む

カルナヴァル

2002年8月3日、早稲田大学人総研分室に、訳者の蔵持不三也をはじめ、桑田禮彰、白石嘉治、土屋進、出口雅敏、大野英士が参集。議論は、ル・ロワ・ラデュリを含むアナル派歴史学の手法から、現代における祭と共同体、あるいはカルナヴァルのなものと民衆運動の結合可能性にまで及んだ。以下、各人の発言の要旨を記す。(編集/大野)

◆平等主義の掘り下げに不満も

桑田 ル・ロワ・ラデュリについては『モンタイユ』(1975)において、中世農民のコスモロジー的広がりや備えたメンタリティを、時空を区切って大胆明快に活写した「時空のピンポイント戦略」が印象に残っています。同様の戦略に従った『南仏ロマン』では、メンタリティをトータルに描き出すという側面は後退し、主観的に読者をのめり込ませる迫力には欠けませんが、数字を駆使して、都市の叛乱を浮き彫りにしていく手法は、乾いた印象を与え落ち着いて読めます。

ただ、最終章「平等の未開人たち」で、同時代の平等思想は近代的な水準に達していないという表現にはやや物足りなさを感じます。むしろ、近代的平等主義を越えるものを可能性としてでも提示してもらいたかった。

◆偶然と必然の関係を見事にとらえる

白石 「出来事と構造」「偶然と必然」の二元論ではなく、「想像力」や「象徴的カテゴリー」といった媒介項に着目することで、事件が種々のカテゴリーの重層する場としてとらえられており、色々な意味で模範的な書物です。

統計の利用により、階層のタイポロジーが精緻化するだけでなく、別の対立と重なり合っているという考え方が、厚いリアリティを

生み出しています。大岡昇平の『レイテ戦記』を思い出しました。

祭や叛乱においては、さまざまなカテゴリーが反転し、重なり合います。そこから新しい要素が生じてくるわけですが、平等というカテゴリーもその一つといえます。

◆歴史と歴史「学」のパラドックス

大野 記述の見事さを認めた上で、あえて言えば、ここに描かれた人物たちの行動はあまりに合理的・理性的に見えます。「貧民」も貴族と対等な個人として意識的に社会闘争に参加している。この時代はフーコーがいう古典主義時代への認識論的な転回点に立っていたわけですが、ここに描かれた世界と現代との間に、認識論的に根本的な差異は発現していないように思う。歴史はかくも透明かつ継続的であったのか、それとも、歴史「学」の視点に問題があるのか。この著作は大きなパラドックスを突きつけているように思います。

◆『南仏ロマン』は「カルナヴァル」の本だ

土屋 事件が、当時の先進地域イタリアに近い南仏文化圏で起こった意義を確認しておく必要があります。この時代、フランス社会は農本社会から重商主義へとシフトしていくわけですが、この書で描かれている税の問題は、生産の主体の変化・階層の分化の一つのパラメーターとして機能している。その上で、こうした移行期、各階層間の軋轢や、民衆の中に生じた歴史のギャップを彼らの想像力のレベルで象徴的に解決する、高度に政治的な機能をもった装置がカルナヴァルなのでしょう。その意味で『ロマン』はまさに「カルナヴァルの本」だと思います。連合赤軍事件が端的

に示す戦後日本の問題とは、こうした象徴機能空間の抹消にあるのではないのでしょうか。

◆民族誌学的権威

出口 『モンタイユ』同様、まさに「小説的リアリズム」によって描かれた著作ですが、著者の歴史記述の特徴については、レナー・ト・ロザルドが『文化を書く』(1986)で検討しています。ロザルドは『モンタイユ』の



座談会の模様

分析から、この作品を「民族誌学的権威」に依拠した記述、としています。つまり、人類学者のモノグラフのように、書き手の権威を確立して「客観的な記述」を構成していくレトリックを駆使している。人類学では、80年代になると民族誌記述をめぐる、そのようなレトリックが問題化されました。とはいえ、「社会的なもの」と「象徴的なもの」とが交錯する場としてカルナヴァルを記述したことは、ル・ロワ・ラデュリの貢献です。

◆不可能性より可能性を論じるべき

蔵持 歴史学と、人類学・民族学などの諸学との共同、歴史資料の操作・処理など、アナル派の仕事の評価はさまざまな問題をはらんでいますが、ル・ロワ・ラデュリがカルナヴァルという現象を記述した方法論は間違いなく今日に受け継がれていると思います。

ただ、歴史上存在した特定のカルナヴァルの記述をこえて、カルナヴァル(的なもの)の本質を記述するのは至難です。カルナヴァルやその構成要素を指す呼称もまちまちで、また常に変容の過程にあります。特に現代は、「祭」が前提していた共同体やカレンダーも消滅してしまいましたし、「祭」に対するメディアの影響も無視し得ません。しかし、祭は形を変えて今も存在し、シンボリックな形では民衆運動を賦活しています。我々は現代のカルナヴァルの不可能性より、その可能性を論じていくべきではないのでしょうか。

★カルナヴァル・祝祭・叛乱をテーマにした本★

◎蔵持不三也『祝祭の構図』(ありな書房、1991年、2446円)

*ブリュゲルの祝祭絵画《カルナヴァルと四旬節の戦い》の中からさまざまな祝祭的要素を取り出し、その構造分析をふまえて、陽気な騒動たちの跳梁するラプレーの祝祭空間を解説する。民衆文化を通時的かつ共時的にとらえ、真の(知)の祝祭へへと導くための関連な祝祭=民衆文化論。

◎蔵持不三也『シャリヴァリ-民衆文化の修辞学』(同文館出版、1991年、3262円)

*語られた歴史と語られぬ歴史。伝統的な民衆文化の真実は、そうした位相のうちにある。多角的にシャリヴァリ(馬鹿騒ぎ)の真実を凝視し、ヨーロッパ民衆文化の深層をえぐる、わか雪初の本格的シャリヴァリ論。

◎レオン・マルケ他/蔵持不三也編著『ヨーロッパの祝祭』(河出書房新社、1996年、2854円)

*西ヨーロッパの祝祭のうち、とくにフランス、イタリア、ベルギーで現在もおお盛んに営まれているものを紹介する。ベルギー、イタリアを代表する民族学者が、実地調査に基づいた貴重な研究を一般読者向けに書きおろしたもの。

◎谷口幸男(著)・遠藤紀勝(写真)『図説 ヨーロッパの祭り』(河出書房新社、1998年、1890円)

*太陽祭、サンタ・クロース、雪男に熊男、バイキング...。クリスマスをはじめ、カーニバルや仮面行事、猫祭りにワイン祭りなど、有名な祭り、珍しい祭りを訪ねる旅。ビジュアルにヨーロッパの四季と精神風土にふれることができる。キリスト教年中行事典付き。

*税込価

本と社会をつなぐ視座

カルナヴァル
『南仏ロマンの謝肉祭』
をめぐって

近代政治の象徴的核心

●桑田禮彰(駒澤大学教員/哲学)

いつでも象徴は政治の核心であり統治の要諦であるが、近代国家は、きわめて洗練された仕方ですそれを法体系の中へと形式化・下意識化し、合理的な衣の下に隠蔽する。だから、それを改めて発見するには、いったん近代の夜明けまで遡り、たとえば南仏ロマンの叛徒のもとに赴いて、政治と象徴が渾然一体となった現場を目の当たりにする必要がある。しかし、私たちが最終的に把握しなければならないのは、近代政治の核心としての隠された象徴性である。特権の排除をめざす平等主義が、象徴的権威(神・王・法・民などによって構成されるもの)による政治的統合力の強化へと結びつけられる近代政治システムをとらえること。注意すべきは、近代の平等思想が根本的には「服従」の契機を廃棄しない点である。それどころか、近代の「自由」が本来的には「自己」を経由する或る必然性への「服従」であってみれば、近代における特権の排除は象徴的権威なしの新たなシステムの「創設」としてではなく、むしろ旧来の象徴的権威の「配置転換」として遂行される。象徴の古さと配置の新しさを、同時に見出さなければならぬ。

「神話」の捏造と「祝祭」の不毛

●大野英士(早稲田大学他、教員/文学)

『南仏ロマン』では、民衆レベルの政治階級闘争が、カルナヴァルのコード/イマジネーションを利用し、その祝祭性・遊戯性によって運動を賦活していく様が描かれた。しかし、現在の多くの社会紛争において大きな役割を果たすのは、イデオロギー的機能を担った神話だ。

たとえば、近著『歴史のタブー』の中でマルク・フェローが「改めて」指摘しているように、ユダヤ人とは、歴史のさまざまな段階で経済的・政治的原因によりユダヤ教に改宗した(多くの民族を含む)利益共同体に他ならない。にもかかわらず、欧米における疎外・抑圧されたユダヤ「民族」集団の右傾化した一部が、ユダヤ創世神話という強力な神話を根拠にパレスチナ先住民への生存空間の抹消・ディアスポラ化を推し進め、それを一極化した世界パワーが軍事的に支援する構造がある。五輪やW杯を含む現代の祝祭の不毛は、この世界パワーが「全体的社会事実」を隠蔽するきわめて政治的な装置として機能し、さまざまなレベルで捏造される「神話」の構造的貧困を解体する動因にはなり得ていない点にある。

カルナヴァルと悪の枢軸

●土屋 進(中央大学他、教員/現代思想)

祝祭空間は、いわゆる「ケ」と呼ぶ日常から、「ハレ」やかな世界へと転身するバーチャルな場所を提供し、異化作用をもたらす。しかし、そのことだけが祝祭空間の役割ではない。おそらく、もっと重要なのは、「現実と想像の回転装置」を提供することではないか。20世紀の初頭、「祭り」の花形は「回転木馬」だった。木馬に乗り、回り始めると、今まで見たことのない世界が紡ぎ出される。人々は「私」であり続けながら、目も眩むような世界を生きているのだ。そういう「現実でありながら、現実でない」世界を共有し、「現実と想像を反転させ」、他者を体験する装置が祝祭空間ではなかったろうか。南仏ロマンでは、社会状況が煮詰まる中で、「想像と現実」を自由に往還する「祝祭空間」を舞台に、さまざまな葛藤と調整作用が有機的に繰り広げられた。そして社会の歯車は動き出す。「正義か悪の枢軸か」という単純な二元論を容認する現代が決定的に喪失してしまったのは、この「象徴的な解決手段の共有の場」、すなわち祝祭空間という「社会的想像力」ではないか。

マニフと街路

●出口雅敏(モンペリエ第3大学博士課程/文化人類学)

フランスにも深刻な社会問題はあるが、マニフ(街頭デモ)も盛んだ。何年前か、私もマニフに誘われた。当時、「移民」排斥を唱える極右政党と関係する議員が県の副知事に選出され、反発を招いていた。集合場所には「普通の人」たちに混じって、華麗なドラッグクイーンやイージーライダー風の野郎ども、顔見知りのホームレスのオジサンや散歩犬を連れ、マダムがいた(彼らの多くは「フランス人」だ)。週末の大通りを一緒に歩き始める。雰囲気はカーニヴァルのパレードだが、街の中心部に近づき始めると、どこからともなくシュプレヒコールが挙がる。「3代選れば、皆、移民の子!」。声も揃い、まとまりも出てくる。沿道の人たちも手を振り、混ざりあった。マニフの想像力が、道路を街路にしていった。「街路」は、政治的な交渉空間として、「対抗的・自律的な公共性」の形成も可能にする。だが今日、マニフも見当たらない私たちの社会のどこに、街路はあるのだろうか? 連帯感も想像力も手放し、声すら交わらずにお互いを見捨てる社会では、夜空の星も星座を描かないだろう。

状況雑感

民営化後の国の仕事

●桑田禮彰

(駒澤大学教員/哲学)

いつの時代でも政治改革の原点は、経済的不公正に対する怒りである。近代前夜の南仏も現在の日本も、その点では基本的に変わらない。いま我が国では「国の仕事」が厳しく問われている。8月末に提出された、道路公団民営化委の「中間報告」を巡る賛否の議論の激しい応酬が典型である。民営化反対派の最終根拠は、おそらく、「競争原理に従った民間の利潤追求の結果生ずる不公正の是正こそ国の仕事であり、そのためには採算性は度外視しよう」という点にある。これに対して賛成派は、「その《不公正の是正》という大義名分が、まったく実現されないどころか、逆にたいへんな不公正を生み出してきた」と主張する。「採算性の度外視」のせいで経営の自律性・効率性・透明性が失われ、「国民に財源を負担させて特定の官僚・政治家・業者・住民のみを潤す不公正なシステム」が出来上がってしまったのだから、もちろん現状認識は賛成派が正しい。そして、現状で民営化は不可避であろう。しかし問題は、民営化後の「国の仕事」である。反対派の言う《不公正の是正》という仕事はなくなる。新会社の業務のチェックがあるし、新会社の業務の補完もある。あらゆる領域で「国営の時代」が終焉し巨大な利権発生装置としての「国」が告発され、不公正は正装置としての「国」が強くとめられている。

編集後記▶「社会科学への関心は、最近急速に衰えたと言われる」(高島善哉『社会科学の再建』1981)。20年前の状況である。これは本離れの現象とも重なった。人文社会科学書の低迷は小社の実売部数を見ても20年前の5割減という数字にはつきりと現れている。他社も大差なしと推測される。昨今ではこの分野の版元各社の間で、売上増を狙った「読書推進活動」が盛んである▶売上激減の原因はどこに求めるか。編集者か著作者か営業力か社会状況か。いずれもそうだがそれが全てではないはずだ。原点回帰。少なくともこの20年間の人文社会科学の体質それ自体に原因があったと見るべきではないか▶先の本で高島はこう述べる。「今日の社会科学には人間が不在であるとされ、これが社会科学からかつての魅力を奪い取った最大の原因とされる」。まさに今日の姿だ。ではどうするか。答は一つ、生きた人間を学問に埋め戻すことである。「一つの専門を深く掘り下げられる人は自ずと他分野の人とも通じ合え、そこから専門をこえた共通感覚が生まれる」(高島)。人文ネットワークの目的もまた、一言でいえば、この「共通感覚」の獲得に他ならない。[新評論編集部 Y]